広報くろさき 10 平成十年十月一日発行（毎月一日発行）四二一号 発行／黒埼町役場 〒九五〇-一一九六 新潟県西蒲原郡黒埼町大野二八四三-一 電話／〇二五-三七七-三一〇一 編集／企画商工課（担当・広報統計係） 印刷／小野塚印刷株

黒埼町の今昔

第198回　執筆　宮田栄門

新聞からたどる黒埼の歴史（六十九）

平成八年三月、信濃川や中ノ口川沿線町村の小学校の児童は漁協で孵化された稚魚を放流した。

（先月号からの続き）

現在、信濃川漁協の組合長兼孵化場長を勤める新潟市舞潟の氏田十三五さんは、昔、信濃川で鮭漁の地引き網をしていた人で、漁協大野支部が昭和四十六年に大野善久の土地改良の用水堀で鮭の畜養採卵を始めた時のことから同所を撤退、現在地に信濃川漁協の畜養孵化場建設に至るまでの中心的役割を果たした人である。以下は氏田さんより聞いた鮭の畜養、採卵、孵化、飼育、そして放流までの苦労話である。

昭和四十六年以来、大野漁協支部が地元で畜養採卵の事業に取り組んできたことは前に記したが、五十年度に至って更に孵化から放流までをしなければ鮭はとらせないという県の方針となった。

これは、大野支部だけでなく信濃川漁協全組合員にとっても大問題であった。漁協としては急遽この事業に取り組むことを決め、あそこ、ここと場所の選定に難航しながらも、五十年中になんとか舞潟の現在地に畜養兼孵化場の建設をみたのである。しかし、待望の施設はできたけれど、この事業にあたった関係者の苦労は並大抵のものではなかった。第一の難問は漁獲した鮭を採卵期まで元気のまま大体五日から十日間位入れて置かなければならない畜養池の問題だった。

村上市の三面川漁協のように、河口で漁獲してすぐ採卵することができれば、畜養の施設など必要ではないというが、信濃川漁協の場合、鮭の漁獲はすべて流し網により、その漁場は畜養場からかなり離れた場所にあった。川魚は昔から、陸にあがったら弱いといわれているため、組合員は雌鮭が網にかかると丁寧にはずし、急いで舞潟の畜養場まで運んだが、この時、鮭が元気でなければ良い卵がとれず、ここでもう十％は落ちるということである。畜養の作業については前に詳しく記したが、舞潟での事業を開始して間もない昭和五十二、三年ころには、畜養池の水質や、その他の問題から畜養中の鮭が弱ったり死んだりして、採卵の目標が半分にも達しないで、県にそのまま報告もできず、氏田さん達は秋田県の漁協までこっそりと鮭の卵を買いに行き、それを孵化させて急場をしのいだこともあるという。また、当時県内はもちろん国内でも平場に、信濃川漁協のような規模の畜養場を持つ漁協は一か所もなく、村松の三ノ宮にあった県の水産試験場から、鮭の畜養池について指導を願ったが技術面では何も得られなかった。そこで氏田さんは、当時信濃川漁協の役員をしていた大野新田町の権九郎酒店の坂井誠二さんが、古い引き網時代から懇意の仲で、しかも畜養孵化事業に熱心な協力者だったことから、坂井さんと二人で二回も北海道へ畜養事業の視察に行ったという。その後、関係者の熱心な研究努力によって、信濃川漁協の畜養孵化技術は向上し、施設も現在では国内随一といわれるに至った。

当時、山田小学校鮭飼育係のみなさん

そして、採卵、孵化から稚魚の放流までの成功率も今日では七十五％から八十五％の高能率化を果たし、平成八年度の稚魚の放流は実に三百数十万匹に達した。

平成八年度信濃川漁協の鮭の稚魚放流

信濃川漁協では平成七年十月から信濃川で漁獲した鮭の卵を、同漁協の孵化場で孵化し、誕生した稚魚を数か月間かけて飼育、四、五センチ位に成長した三百二十三万匹を平成八年三月、信濃川に放流した。

また、漁協では、同年放流分の稚魚の一部を信濃川や、中ノ口川沿線町村の各小学校の子供たちに稚魚放流を体験させて欲しいと呼びかけた。依頼を受けた黒埼町の大野、板井、木場、黒鳥の四校が二十九万匹の稚魚を、大野町裏の中ノ口川の現在漁船や、レジャーボート等の係留されている付近に放流。そして、山田、立仏の二校は十万六千匹を新潟ふるさと村後ろのときめき橋付近に放流した。

鮭の卵を孵化し稚魚の放流までを体験した山田小学校鮭係の子供達

平成七年、山田小学校長が宗村奎助さんの時、鮭の卵の孵化から稚魚の放流に至るまでを子供たちに実際に体験させたいと信濃川漁協に申し入れ、鮭の卵約三千粒をゆずり受けることになった。

早速、山田小学校の三階廊下に設けられた水槽（九〇センチ×五〇センチ×五〇センチ）には、循環器や温度計が取り付けられ、信濃川漁協に上山田から勤務している斉藤孝さんの指導によって鮭の卵は水槽に入れられた。

鮭飼育係の子供たち

山田小学校では、五年生（男女）に鮭係として稚魚の世話をして欲しいと話したところ、大久保英輝くん、高島美紀子さん、富樫茉由子さん、本田仁美さん、田辺将志くん、鈴木涼一くん、斉藤かおりさん、大塚亜沙美さん、斉藤裕司くん、西山恵さん、大島ちづるさん、牧岡大介くん、渡辺裕樹くん、高野利花さんらの子供たちが申し出て、一日を二、三人の当番制にしてこの作業に当ることになった。

以下は山田小の鮭係の子供たちが、自分たちの手で孵化させた鮭の稚魚を、平成八年三月の放流まで、約四か月間にわたって飼育した苦労話である。

「鮭の卵は非常に弱く、漁協から学校に送られてきた時、すでに三千粒の内百粒位がすれてつぶれたりして死んでいた」

「卵を預かって約一か月位して卵の中に鮭の目の玉が見えてきた」

（続く）

「広報くろさき」は資源保護のため再生紙を使用してます。